

作家
元国際線乗務員
黒木安馬

【プロフィール】高校時に米国留学後、早稲田大学を経てJAL国際線客室乗務員として30年勤務。世界初の「カラオケ・フライト」や「1万メートル上空・北島三郎機上コンサート」などを実現させる。千葉の自宅は1300坪の山林を開墾してプール、テニスコート、コンサートホール等を手作りする。現在、㈱日本成功学会社長として自己啓発や社員教育で講演中。著書に『ファーストクラスの心配り』、『あなたの人格以上は売れない!』(プレジデント社)、『成「幸」学』(講談社)、『出過ぎる杭は打ちにくい!』(サンマーク出版)、『面白くなくちゃ人生じゃない!』(ロングセラーズ)、『小説・球磨川』(上下巻・ワニブックス)などがある。
E-mail:yasuma@myad.jp URL:http://www.3percent-club.com

21世紀だ！ ―――― 人生・農業リセット再出発 175

日本初の女医のピンポイント目標設定

病気になったときの頼みの綱は医者しかいない。ところが、文明開化が始まった明治８年（1875）まで、医師免許というものは我が国にはまったくなく、ちょっとした知識と経験があれば誰でも医者として開業し、民間療法として漢方医療や祈祷師などがごちゃまぜになっていた。本格的に西洋医学が取り入れられるようになると、国による「医術開業試験」が制度化される。かなり難しい試験のようで、合格率は10%程度だった。

明治維新17年前の幕末に、いまの埼玉県熊谷市で末娘の五女として生まれた荻野吟子（おぎのぎんこ）は、幼いころから利発で男勝りだった。父が教える寺子屋でも、男の子たちに積極的に混じって勉強し、その記憶力には大人たちも舌を巻いた。16歳を過ぎると、隣村の名主の長男に望まれて嫁ぐ。誰もが羨む玉の輿で、夫婦とも美男美女カップルともてはやされた。

だが幸せは３年も続かず、悲劇が始まった。下腹部に激痛が走り、ついには寝たきりになり、実家に帰って療養する。原因は、女遊びをした夫が持ち帰った淋病であった。抗生物質もない時代で、化膿して悪化したのだ。離縁され、東京の順天堂病院に入院。まだ19歳だった吟子は、そこで死ぬほど衝撃を受ける。男性医数人の診察を受けるにあたって、皆の視線の中で、両足を広げさせられたのだ。男性の前で肌を露出することさえ恥ずかしいとされた時代に下半身を露出したまま、じっとしていることは死ぬほど屈辱的なことであった。

婦人科治療の医師であっても女性の医者は一人もいない。吟子は、決心した。そうだ、私が医者になって、このような恥ずかしさに苦しむ女性の患者たちを救ってあげよう！　吟子は持ち前の負けん気で猛勉強を始め、東京女子師範学校（現・お茶の水女子大学）の１期生として首席で卒業する。

医術開業試験を受験しようと願書提出に行ったら、日本には女医という前例がないので受験はできないと却下される。翌年もまた同じ理由で門前払いになった。

吟子は諦め切れずに昔の資料を次々に調べた。奈良時代の古文書『令義解（りょうのぎげ）』の記述の中に、女医の育成をしたという文言を発見する。ついに国はその事実を否定できずに、吟子に受験の機会を与えた。吟子は見事に合格。女医を志してから15年、34歳にして日本初の女医となり、湯島に「産婦人科荻野医院」を開業した。湯島近辺には遊郭が多く、性病に苦しむ女性たちが多かったのを救いたかったという。

吟子が孤軍奮闘して女医として活躍している39歳のとき、13歳年下の青年と出会った。熱烈な恋愛の末、その青年・志方之善（しかたゆきよし）と、周りの反対を押し切って結婚する。そして、キリスト教徒の理想郷を北海道に創るという之善の夢に共感して病院を捨て、北の大地の原野開拓に向かう。なんとも波瀾万丈な一人の女性の生きざまであった。荻野吟子……明治日本の英傑の一人である。

こぶしで腹を突いても大したことはないが、その手にペンを握って刺せば腹を貫通する。いかなる願望も、なんとかしたいなあという曖昧なものにとどまっているなら実現はおぼつかない。より具体的に、その最終目標をカラーで絵に描けるようなピンポイント願望設定をすれば、必ずそのようになるものだ。逆をいえば、絵に描けないようであれば実現にはまだまだほど遠い。